

移入に關する同助教の^註研究は調査進行及整理上の指導書であつた。昭和五年に阿武隈川の梁川・福島間、同六年の秋には下流荒濱方面、同七年は阿武隈川上流部の一部と猪苗代湖、同八年には阿武隈川上流部全部及び阿賀川、同十年鮫川方面と範圍を擴げて見た。然し資料は尙不足してゐるにもかゝらず一應發表したのは將來研究上の大方の教導を得たいが爲めである。

註一、田中啓爾 地理學論文集。

同 近江盆地に於ける鐵道開通前の鹽及魚の移入路に就いて 大塚地理學論文集 四。

新著紹介

○白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊報告

四六倍判一四八頁 寫眞版四〇葉附圖一葉

東京梓書房發兌 十年九月 定價三圓八〇錢

昭和九年十二月から翌十年一月に亙つて京大旅行部員によつて行はれた白頭山冬期旅行はヒマラヤ探検の豫行に近いものだと云はれたものである。實際耐寒試験か或は自然現象の殆んど癡むつてゐる状態を賞視するかの以外、學問的探検の

効果を澤山に獲得することの出来ない冬期積雪の間に於ける旅行であつた。本報告中第一部は隊長今西農學士の白頭山遠征の意義を述べたものと、準備と日誌から成り、日誌の内にはチームウオーグが隊員の協同によつて如何にうまく行はれたかを示してゐる。第二部は専門的の報告で氣象・植物生態・動物・醫學的方面及寫眞に就いて述べられてゐる。皆新進學者の記述である爲めかなり理窟つばいが多い。附録として會計報告以下いろいろあつて、巻尾を飾るものは四十葉の美しい寫眞である。本書は寒中の登山家や、探検隊組織に當つて參考になる所が多い點で地理學界に紹介して置く價值がある。(S)

○昭和十年 全國市町村別面積調 内閣統計局

四六倍版九七頁 東京統計協會發行 十年十月 定價五五錢

全國と題してはあるがこれは内地の市町村別の面積を方料で示した表である。之と共に府縣別面積と市郡別面積との二表も併せ掲げてある。面積は五萬分ノ一地形圖上で測定したもので未だ地形圖のない小笠原島の南島島と沖繩縣島尻郡の島島とは面積を出してない。朝鮮の各面の面積は夙に計測されてゐたが内地の市町村の面積の表があれば地理學殊に人口の密度などの様な人文現象の密度を出すに都合がよいと思ふたのは久しいことであつたが、此の表を得て日本の地理研究者に一大武器を與へたことになつた。なほ從來各府縣や那市

などの面積は確かな據所なきためまちまちになつてゐたのを統合することになつた。誠に地理愛好者の必ず座右に備へなくてはならぬものである。因に内地の面積は三八二、五四五方軒四二である。(N)

○日本民族

東京人類學會編 岩波書店發行
定價三圓五十錢

東京人類學會創立五十周年の記念論文集として世に出た本書は、菊版四七頁の尅大な書籍であつて、あらゆる權威の各方面から見た日本民族についての論文が揃つてゐる。筆者は之を一讀して我學問の進歩の跡の著しいのにもつくり目させられたものであるが、集むる所の雄篇は清野博士の日本石器時代人類論の變遷で、コロボツクル説やアイヌ説の過去から大正以後數多の石器時代の人骨が出土したので、こゝに人類學は其本來の立場たる生物計測學から實物資料によつて論ぜらるゝに至つた歴史をのべ、太古の日本石器時代に繩紋土器を使用せる人種があつたが、この人種は日本人にも似てゐるし、アイヌ人にも似た所がある。しかし石器時代人とアイヌ人との體質差は現アイヌ人と日本人との體質差よりも大であると斷定して、我國中部及南部の石器時代人は新らしくなる程日本人に似てくる、これは近接人種との混血と自然の進化の結果であるとのべ、古畑氏の「血液型より見たる日本人」ではオツテンベルグの湖南型は日本型とよばれるべきであると論じ、日本型の血液は日本人に共通である、これと類似のもの

は世界中にハンガリー人を除く外にない。日本民族は日本島で創造されたものだと斷じ、「朝鮮人と日本人との體質比較」(上田常吉氏)は朝鮮人と日本人は近縁の種族である。特に中部朝鮮人と近畿日本人は全くひとしい。身長・頭骨・顔面・高徑等によりさういふことが出来る。蓋し日本は全土に廣がれる身長短、中頭で頭蓋低く顔面低き種族が、長身にして短頭頭蓋高く顔面亦高き朝鮮系のものに中斷された形であるとき新來の半島種の混血の少いのがアイヌといふ人種の島ではないかとのべ、「日本人と南洋人」(長谷部言人)では日本人は地方的に凡そ短身中頭、長身中頭、長身短頭、短身短頭の同型とその中間型に分つべく九州に短身短頭が多いが日本人と南洋人との關係は案外に稀薄であると論じてある。農耕文化の宗教的特徴(宇野圓空)數詞からみたアイヌ民族(金田一京助)日本石器時代文化(八幡一郎)などいづれも異彩ある論策であるが、最後に「朝鮮に於ける考古學的調査研究と日本考古學」(濱田教授)の雄篇がある。思ふに日本の考古學は將に東亞全體の考古學が明になつた上でいよいよ進むもののだといふ博士の見解は正鵠であつて、日本の先住民に對する朝鮮半島からのみの移住を論ずるだけでは、全般にわたる解釋とならないことを教へられるのである。近來の名論文集として讀者にその一覽をすゝめる。(藤田)

○地理論叢第七輯

京都帝國大學文學部地理學教室
古今書院發行 定價三圓二十錢

第七輯も亦前輯と同様若き學徒の涙ぐましい努力の結晶である、地理學者としての本多利明(内田秀雄)章學誠とその方志學(室賀信夫)は共に古人の地理學を取扱つたもの、一は西洋學の流れをくみ、一は方志學といふ支那の史學に屬する地誌取扱方を論じたもの、舊城下町景觀(小葉田亮)は廢藩後の景觀分析を主として取扱ひ、陸岡の牧馬(兼子俊一)上越地方のもぐさ(土田英夫)紀州沿岸の水産地理(藪内芳彦)はいづれも經濟地理である、本邦海岸潟湖埋立干拓史の斷片(小牧實繁)は第一報につぐもの、日本等溫線(瀧本貞一)植民地理學上より見た對外發向系、田中秀作)の二つは特殊の研究とみるべく、其他隱岐列島の人口(西川榮一)松前の行商(野澤清)信濃に於ける首邑の變遷(米倉二郎)等とりどりに一讀すべき論文である。(藤田)

○太平洋を繞る國々

小野鐵二、別技篤彦、共著

太平洋は世界最大の海洋である。併し現代技術の空間克服と政治經濟の諸事情。殊に我が國勢力の増大とはこれを世界の地中海たらしめた。而して世界史のこの新しい舞臺に於ける花形が日本であることは言ふまでもない。従つて、太平洋の波打寄せる諸國の事情に就いての相當深い認識は吾々日本人の國民的常識として要求せらるべきものである。特に經濟上の抗爭、外交上の紛糾、軍備上の對立が儼然たる事實として存在する現下の時局に際しては、それは絶対に必要であると言はなければならぬ。學者にも實業家にも教育者にも學

生々徒にも。

この時に當つて小野・別技兩學士によつて「太平洋を繞る國々」の地理書が完成せられ我が國讀書界に送り出されたことは誠に有意義のことであり、充たされなかつた要求にびつたりとあふものと言ふべきである。

地理書とは言つても、この書は世間一般に有りふれた地理書とは些か選を異にしてゐる。これ程の名文獻筆は日本語で書かれた他の如何なる地理書にも發見することは出来ないかも知れない。これ程氣樂にすらすらと讀める地理書は實際類ひ稀れである。何處までも讀者を引きづつて行かなければ止まぬ。併し、文章は實は末の末であるのではなからうか、如何なる名文も内容之れに伴はなければそれは實に空の空、砂上の樓閣にも等しい。紹介者が此の勞作を推賞する所以はその文章の優秀の故ではない。全くその内容の卓抜によるのである。

この書の著者小野・別技兩學士が如何なる人士であるかは言はない。唯、何處までも良心的な學者であると言ふだけで充分であらう。吾々は安心して、従つて楽しんで頁を繰ることが出来るのである。加之、卷末には豊富な内外の參考文獻が掲げられてゐるから、熱心な讀者は更にそれによつて自らの研究の手がかりを得ることも出来る。

本書之を前後兩篇に分ち、前編に於いては太平洋そのものとその周圍諸國の各方面に於ける關係等の重要な事柄を説き

充分な豫備知識を得しめた後、後編に於いて太平洋を繞る國々の現勢を明かにするを主眼として、シベリア・滿洲國・支那・佛領印度支那・シヤム・英領マラヤ・フィリッピン・東印度・オーストラリア・ニュージラランド・アラスカ・カナダ・北米合衆國・メキシコ・中米諸國・コロンビア・エクアドル・ペルー・チリ等の自然・風物・人種・歴史等からその現勢、殊に經濟事情等の重要事項に説き及んでよくこれを四六版七百餘頁のうちに纏めてゐるのである。太平洋を繞る諸國に關する認識のために必讀の文字であるのは勿論、世界の大半を占める地球部分の地誌、而も最新の地誌の知識を得るためにも最良の指針となるものである。

(東京市目黒區中目黒二ノ五八二、章華社版、定價三・八〇)(小牧)

雜 報

○日本の貿易に對する獨逸當局の觀察

日本の電球が六布、自轉車が十二馬克など、ペラボウに廉いのをかきにかけて日本品排斥を企てる國の多い今日獨逸の統計局長グレーフェル氏は躍進日本の貿易の數字を解剖して、之を獨逸の海外貿易の發展に比べて其間著しき差がない、日本は必しも獨逸の商敵でないといつた。(ターゲブラット誌上)

氏の見解によると日本の對外貿易は一九三一年に十一億圓一九三二年に十四億圓、一九三三年十九億圓、一九三四年二十二億圓といふ風に増加したけれども一方圓價は下落してゐるから之を馬克にかへてみると、一九三一年に二十三億六千萬馬克であつたものが一九三二年には十六億八千萬馬克に激減し、一九三三年には十五億八千萬馬克に下り、一九三四年になつて漸く十六億二千萬馬克に達したにすぎない、即ち日本は何も別に躍進したのではない、但し右馬克價に換算するのは正しくはない、日本の國內物價の圓價は上騰してゐない、金相場と物の相場と一致しないからであるから圓の物價を卸賣指數で換算しなくてはならぬ、この計算に従へば一九三一年を一〇〇として一九三四年は一六三となり、右の十六億二千萬馬克に相當する、従つて一時喧ましくいはれた日本商品の侵略といふものは事實驚くべきものではない、換言すれば日本の輸出貿易の發達は左程大きくはない、之を地方別に觀察すると日本の對北米輸出の如き一九三四年に激減した、一方中米・南米に増加したけれどもその數字は大きくない却つて獨逸の對中南米輸出は日本よりも一千万馬克及び一億七千七百萬馬克がそれぞれ多い。

日本の輸出が増進したアジア諸國で支那・印度・セイロン・馬來・比律賓・シヤム等でも、それは日本品のみが増加したのでなく、獨逸品も同年三千四百萬馬克を増加し、一般的に日本品が増加した地方では獨逸品も亦共に漸増した、今日本